（城西人文研究第19巻第1号）

イェイツ「自我と魂の対話」

小堀隆司

果しない時の流れのなかにあって生の完結を目ざす道行きはふたつの軌跡を描く。ひとつは時間の流れから垂直に超出する軌跡、もうひとつは時間のなかで往環運動を繰り返す軌跡といったように、全く対蹠的な軌跡がその道行きに描かれていく。そこに生の完結として措定される指標とは、＜存在＞の絶対性と＜存在＞の相対性であるのはいうまでもない。＜存在＞の絶対化という道行きは、あるがままの不浄な生を否定、浄化してついに純粋な全一性を獲得するに至る道程を物語り、また＜存在＞の相対化という道行きは、生の転落と登攀の繰り返しとも呼ぶべき反復を原基に据えて現実の俗なるものにどこまでも関わりながら、その徹底さの裡に何かが顕現するといった道程を辿る。そして相対的なもの、俗なるものを超越した＜存在＞の絶対化は、目ざすその聖なる全一性を誇る地点への一途な登攀に反映されている。それに対して＜存在＞の相対化は生の完結を放棄するかのように何かを欠如した生の絶えざる反復に映し出されている。

現実の俗性、＜存在＞の相対性を受容する生の方位と現実を超越した聖性、＜存在＞の絶対化に重心を取る生の方位とは、このように相対立するものであるのはもちろんだが、しかし、その一方ではこの対立関係には互いの境界を

超え出ようとする可能性が秘んでいる。異なった生の方位はどこか通底し合う場所をすでに抱え込んでいる。それは、ある言い方をすれば、ふたつの方位を包摂する場所でもある。〈存在〉の絶対性は相対化され、〈存在〉の相対性は絶対化される機運が〈存在〉を目ざす途上のある場所にもたらされる。

イェイツの「自我と魂の対話」'A Dialogue of Self and Soul'(1)は、そうした相対立する生の方位を掲げてそこに拮抗と交錯を展開させている。自身の内なる対話ともいうべき両者のダイアローグを劇的に演ずるために、自己に対して他者を登場させるこの詩の究極的な語り手である〈私〉はその他者に仮面としての役割を課す。こうして〈私〉は、現実を排除し何よりも自身の浄化を希う仮面としての「私の魂」と、生の俗なる現実に依拠すべきことを主張する、いわば素顔としての「私の自我」を登場させて〈存在〉を巡る対話をその背後で繰っているのである。

まず「私の魂」が邪念をふり放ってある一点に「おまえの心」を集中させるようにと「私の自我」に命令する。時代を超越して夜空に聳立する「塔」、そしてその外に漂う夜の静寂とした雰囲気に思いを致し、さらに「隠された極を示す星」'the star that marks the hidden pole'〈と「おまえの心」を向けるべきことを訴える。「私の魂」は最後に、完結を見る終着の地点、もしくは「闇」の在処を明かして最初の語りかけを終える。

Fix every wandering thought upon
That quarter where all thought is done:
Who can distinguish darkness from the soul?

さまよう思いすべてを収斂させよ
すべての思いが完成されるあの場所に。

もはや誰が暗闇と魂を区分けできようか。

（六―八行）

現実のなかをあれこれと迷走する「思い」（または「思想」）が、もはや「さまよう」ことなく確固たるものとして「完成」を遂げる「あの場」とは、なによりもまず生を完結させる地点を指す。だが「完成」とは、ある側面からすれば死をも意味している。たとえば、W・H・オドンネルはこの‘done’を「完成」としてではなく、人間およびその「思想」との「絶縁」というひとつだけの意味に捉えているが[2]、むしろその言葉には錯綜した位相を看て取るべきではないだろうか。「完成」と同時に死を包含すると見做せる「あの場所」は、また、もうひとつの意味を帯びる可能性が考えられる。すなわち、「あの場所」は生の湧出する地点としての生誕をも取り囲んでいる。ただし語り手である「私の魂」にいわせれば、たぶん「あの場所」は「完成」もしくは死を可能にする場所であろう。それではここにおける「暗闇」とは何か。時間的に類推すると、それは「さまよう思い」を抱懐する人間の死後とその誕生前の状態を象徴しており、そして「あの場所」をも包み込んでいる。内面の問題として捉えると、生の胎動する原初的（生誕）にして究極的（死）な領域としての「あの場所」は、したがって現実のどこにも外在しない処であって、仮構された非在としての内部空間を意味する。非在としての内部空間は、過ぎ去りし生誕への郷愁と来るべき死への予感によって構築されたものである。

時間や現実を超越した、少なくとも「私の魂」には永遠と思われる「あの場所」、そして「塔」や「星」などがこのように称揚されると、それに対して「私の自我」は永遠なるものとして「佐藤の古い刀」を提し出す。同時に、日本刀を納めた「木の鞘」に巻きつけてある美しい「絹の布」にも心を留める。「花の刺繍」を配ったその「絹の布」は「ある宮廷の貴婦人が着ていた着物」からとったもので、いまでは「ぼろぼろだが、なおも守り、色褪せてはいる

が、なおも飾ることができる」'Can, tattered, still protect, faded adorn.'[3] のだと「私の自我」は讃美する。その口振りは自身の生を「絹の布」に垣間見ようとする姿勢を感じさせる。移ろいゆく時の流れのなかで「絹の布」が「古い刀」を昔のままに「守り」つづけてきたということ、それは単に永遠性を崇拝するがために「私の自我」がそう主張しているのではない。むしろ時間のなかで永遠なるものを死守する姿勢に〈存在〉への肉薄を訴えようとしているのではあるまいか。永遠としての「古い刀」を、人間の内奥に秘む力、人間を〈存在〉へと常に駆り立たせる根源的な生命力の象徴と捉えるならば、「古い刀」を守って擦り切れた「絹の布」は生の原質たるその力に衝き動かされて〈存在〉へと向かう人間の生の有様そのものを象徴しているといえよう。あるいは「古い刀」を〈存在〉と、「絹の布」を人間の生と見做しても、また「古い刀」と「絹の布」をともに人間の生命と見做しても大きな過誤とはなるまい。因みに次につづく「私の魂」の発言のなかでは、その両者は「愛と戦いを象徴したもの」であるといわれている。「私の魂」からすれば、それらは極めて現世的で血腥く、むしろ蔽わるべきものである。

このように過ぎ去りしもの（「刀」および「布」）へなおも思いを遡行させる「私の自我」を見て「私の魂」は〈回想〉よりも自分の行末を案ずるように促す。人生も盛りを過ぎたからには、いまも変らぬ、あの「昔ながらの夜」にこそ思いを寄せ、そうしていよいよ、背負ってきた「死と誕生の罪」から自分を「救え」と「私の魂」は激しい口調で語りかける。すると、現世的なものを浄化して自身の「救済」を訴える「私の魂」に対して、「私の自我」はそれとは全く反対の極に立とうとする。すなわち「夜を象徴した塔」に対抗するものとして「刀」や「布」を「昼の象徴」に掲げ、さらに、

And claim as by a soldier's right
A charter to commit the crime once more.

（私は……）兵士の権利にかけてするかのように
もう一度その罪を犯す特権を要求する。

（三一―三二行）

といって反対表明をする。時間の外へと超出して救済される道程には眼もくれずに、「私の自我」は汚れた生を再び生きるという反復としての生をここに宣言するに至る。こうして両者とも生の行き着く場所を明らかにすると、「私の魂」はさらに完成さるべき生の様態を披露するが、そこには、予想もしない反転が待ち受けている。

無なる「暗闇」に包まれた「あの場所」に「さまよう思い」がその生の旅程を終えたとき、すべてが無みせられているがゆえに、そこには「豊穣さ」が「心の水盤に満ちてはこぼれ落ちている」情景が窺える。「私の魂」の視る風景のなかでは、もはや人間は人間でなくなる。いや、まさに「私の魂」が人間を真に人間へと完成させたというべきであろうか。それはともかくとして、現実の俗なるものに繋縛されてきた人間（＜私＞）は「私の魂」の導きによっていまや現実から離れようとしている。すべてを脱ぎ去てて「耳も聴えず、口もきけず、また眼も見えない」状態にある人間は、無なる「豊穣さ」のなかで罪深き生の救済を果してついに完成の域に到達する。そこでは、完成されたことの証しとして次のような様態が看取される。「心の水盤」に「豊穣さ」がもたらされたのは、どうしてなのかといえば、

For intellect no longer knows
Is from the *Ought*, or *Knower* from the *Known*——
That is to say, ascends to Heaven,

知力がもはや「あること」と「あるべきこと」を
または「知るもの」と「知られるもの」を見分けはしないからだ、
すなわち、知力は天上へと昇るからだ。

（三六―三八行）

と「私の魂」が語るように、対立物の、あるいは主客の融合された様態にあるからこそ、完成は可能となった。しかし、その状態は主客のいまだ分化されてない混沌とした様態をも物語っている。始源と究極、混沌とした原初的な領野と完成された領野とが渾然一体となった世界、つまり「天上」へと「昇り」つめることによって「私の魂」は、人間の〈存在〉を絶対化するのである。

いうまでもなく『幻想録』*A Vision* でイェイツはその辺の事情を述べている。それによれば、人間の生を形成するものとして、彼は「四つの機能」を持ち出して生の類型化を試みているが、「あること」、「あるべきこと」をそれらの「機能」のうち、それぞれ「意志」と「仮面」に見立てている。また人間の思想とその対象物を示す「知るもの」、「知られるもの」を「創造的精神」と「運命体」に准えている。[4] 両者の区別が判然としないのは、その状態がいわゆる月の「第十五相」と「第一相」の性格を帯びているからであり、したがってそれは人間の生を完全に超越した世界を物語っている。[5] もちろん生の究極は「第十五相」に、生の根源は「第一相」に充塡されるが、[6] この詩の脈絡に沿っていえば、生の根源としての「暗闇」が「第一相」を覆い、生の究極としての「天上」がまさに「第十五相」を仄めかしている。しかし、「暗闇」に包まれた「あの場所」が生の原初的にして究極的な領域だとすでに指摘しておいたように、ここにおいても「天上」の在処は『幻想録』による遠近法からはずれて矛盾を孕んだ重層的な構造を形成している。生の根源は「暗闇」と、生の究極は「天上」とだけ類縁関係を結んでいるわけでなく、その逆もまた成

り立つ。つまり、それらは交錯し合っており、渾然として一体なのである。

かくして生の根源と究極、「暗闇」と「天上」に至る道程を開示し終えると、「私の魂」は不吉なことを口ばしる。「天上」の世界への参入は「死者だけが許される」のだと、「死者」ではない「私の魂」がそう語る。その結果として、叶わぬ浄化、完成を目前にしながらも、「天上」への旅を謗めざるを得ないことになるならば、「私の魂」はいかなる思いを抱え込んで、いかなる位置に立つのであろうか。動揺と生の不安を吐露して「私の舌は石となる」と呟く「私の魂」は、もはや現実と夢想された「天上」との境界には立っておらず、その境界線から微かにずれた現実の側に佇立しているのだろうか。「私の舌は石となる」という情態は、しかしながら、それとは逆に動揺やら不安やら、そういった人間の情動いっさいを捨象した、いわば無機的な状態を表しているともいえる。さらにいえば、無機的な状態とはまさに「死者」の謂なのかもしれない。現実と「天上」の境界に独り立ち尽くしたまま、石化することによって「私の魂」は〈存在〉の絶対化を成し遂げた、とそう見做すことも可能であろう。このように「私の魂」の行方は二通り考えられるが、敢えてどちらか一方の行方に「私の魂」の然るべき姿を求めようとするならば、その決め手となるものはこの詩の第二部における「私の自我」の語りかけに見出されるだろう。

現世での罪深い生を再び生きることの裡に然るべき姿を見る「私の自我」は、第二部でそうした生に対する感懐を述べる。人間とは、凡そ悟りとか完成に昏く「盲目なる」存在であって、不浄な「溝」に自ら滴らすその「雫」を飲んでは生きるのだ、とまず「私の自我」は語る。R・スヌーカルによれば、どちらとも「盲目」である「私の魂」と「私の自我」はその対象を異にしているが、たとえば「私の自我」の「盲目」とは「天上」の栄光に対するそれである。また、「雫」とは「天上」への夢から人間を解放して「世俗的恩恵」'a secular blessedness'をもたらすことができる、と述べている。(7)「私の魂」の目ざした聖なるもの、「天上」に対しては全くの無関心を装う「私の自我」は、俗なるものが纏わり付こうが、そうした結果もたらされる悲嘆や困惑に襲われようが、すべてを受け容れることに徹

する姿勢を「私の魂」に突きつける。そして生の醜さばかりを晒け出すような人間の無意味で辛い道行きを、ストイックなまでに必然として受け止めようとするポーズを採るのである。つまり「成長することの辛さ」や「少年の頃の恥辱」や「少年から大人に変ってゆく時の苦痛」、さらには「未熟な人間が自分の不器用さに直面する時の辛さ」。完成からはほど遠く常に何かを欠如した情態に想到するとき、このように覚える暗澹とした心の有様に対して、完成を嫌う「私の自我」はそれを必然なものとして受容し、じっと「耐えろ」と厳しい命令口調で相手に迫り寄る。

未熟であることに「耐え」ようとする意志の裡に、生の活路を拓くべきだと得心する「私の自我」が「完成された人間」に言い及ぶと、その口吻はより厳しく批判的で、「完成された人間」のその完璧さにすら否定的な懐疑の眼を向ける。「完成された人間」は、察するに「私の魂」の夢想した「天上」に住まう人物からはそう遠くはあるまい。

How in the name of Heaven can he escape
That defiling and disfigured shape
The mirror of malicious eyes
Casts upon his eyes until at last
He think that shape must be his shape?

あの姿は自分の姿にちがいないと、ついに思うまで
悪意に充ちた眼をもつ鏡が
彼の眼に映し出す
不浄で醜いその姿から

一体どうして逃れられようか。

（五〇―五四行）

「不浄で醜いその姿」を「鏡」に晒け出す「完成された人間」は、いかにして自分が現実に依拠して生きているかを自ら証し立てしている。そうであってみれば、凡そこの現実において「完成された」と思い込むのは桁はずれの錯覚にすぎない。ここに「私の自我」は、「完成された人間」といえども、その依って立つ処は俗なる現実であるという揺がぬ事実を叩きつける。そしてさらに「完成された」と思われたその「人間」は、実は「不浄で醜い姿」をした〈不完全な〉人間であると確信してやまない。

ところで「鏡」に宿る「悪意に充ちた眼」とは、「鏡」を見ているこちら側の人間の眼であるのに間違いはないが、ここでは自分のなかに生きていていつも自分と敵対する、いわば他者の眼として「鏡」の前に立つ自分を見凝めている。「悪意に充ちた眼をもつ鏡」は「完成された人間」をそのまま忠実に映し出すといった模写能力を備えた〈鏡〉ではなく、見るものと見られるものとの間に差異を、たとえば完成と未完をもたらす〈鏡〉として機能しているといえよう。さらにこの「鏡」は、完成が未完であったと思い知らせる不同としての〈鏡〉から、未完はついに未完であると認めさせる同一としての〈鏡〉へと変容する可能性を秘めている。それは「完成された人間」の「鏡」に映るその不完全な姿こそ、まさしく自分なのであると思う、そういう時の到来を「私の自我」が仮想するからである。ならば、こうして「鏡」に映る「不浄で醜いその姿」が自分のありのままの姿だと果して認めたとき、この「鏡」は自らその「悪意に充ちた眼」を「鏡」のこちら側に立つ人間（「完成された人間」）に向けるのをやめるだろうか。また「不浄で醜いその姿」から本当に「逃れる」ことが可能なのだろうか。「悪意」を持たずにひとの形姿をそのままに映す〈鏡〉は、もしかすると、結局どこにも見当らないのではないか。なぜそうなのか、存在論的にいうならば、

自分は＜鏡＞に映る自分であるという同一性にはとうてい辿り着けないからである。「完成された人間」はもとより「未熟な人間」といえども、凡そ生を享けた人間からは「悪意に充ちた眼」は消え去ることはないのではないか。「悪意に充ちた眼」とは、事実を事実として厳しく見据える根源的（ラディカル）な＜眼＞であるにちがいない。

＜鏡＞を前にして＜私＞は＜私＞であるという自同律は、しかしながら、この場面にあっては、辿るべき＜存在＞との関係よりもむしろ＜存在＞から凋落した自身＜「不浄で醜い姿」＞の自己確認（アイデンティティ）との関係に深く基づいていることを考慮すれば、その「鏡」における同一性は否定されることはないかもしれない。そう断言するのは可能だが、にも拘らず、やはりその同一性には疑問が残る。つまり「完成された人間」が「鏡」に映る「あの姿は自分の姿であるにちがいないと思う」（傍点＝筆者）、この場面に同一性を見るわけだが、＜私＞は＜私＞であるという自同律とそれとは趣を異にしている。というのも、そこに‘must’と‘think’が介在することによって通常の自同律とはちがって曖昧で不確かなものと化しているからである。＜AはAである＞と＜AはAであるにちがいないと思う＞との間には、大きな径庭があるといわなければならない。果して「悪意に充ちた眼」はその「悪意」を棄てて新たな表情を湛えるのだろうか、また「鏡」は差異をもたらさない＜鏡＞に変容するのだろうか。その真相は、前述した「私の魂」の行方と同様に、第二部の後半を俟って初めて明かされるであろう。

こうして第二部の後半に入ると、いよいよ「私の自我」は「私の魂」に向かって俗なる生の方位を語りかける。そもそもこの詩は人間の内なる対話として「私の魂」と「私の自我」を登場させたわけだが、第二部ではなぜ「私の自我」だけが語っているのか。それは「私の魂」の、「天上」への昇天を意味するからだろうか。あるいは「私の自我」との対話において敗北を喫したことの証しであろうか。「私の魂」に対する「私の自我」の優位性はよく指摘されることだが、たとえばRエルマンは決して和解することのない両者にあって、新たな認識と力を獲得した「私の自我」に勝利を認めている。(8) もはやダイアローグの見当らないこの詩を「自我と魂のふたつの独白」と命名すべきだと主張

するH・ブルームもまた、唯我論を生の原基に据えた「私の自我」に勝利を見ようとしている。(9) 人間の内なる対話としての「自我と魂の対話」には、しかしながら、その背後に主たる＜私＞のいることを忘れてはならない。「私の魂」が「私の舌は石となる」と呟いて沈黙したとき、＜私＞はそこに自ら仮面を剝がした「私の魂」の赤裸な姿を見た。そして地に置かれた仮面を手にして＜私＞は、「私の魂」の代りに新たに造型されるべき仮面を被るように「私の自我」に促すのである。「私の魂」は「私の自我」のなかで、あるいは「私の自我」が「私の魂」のなかで生きているにちがいない。

I am content to live it all again
And yet again, if it be life to pitch
Into the frog-spawn of a blind man's ditch,
A blind man battering blind men;
Or into that most fecund ditch of all,
The folly that man does
Or must suffer, if he woos
A proud woman not kindred of his soul.

私は喜んでそんな人生を再び生きよう、
さらに何度でも、たとえ蛙の卵がこびりついた盲人の溝
盲人たちを打ちのめす盲人の溝に

落ち込むのが人生であったとしても。
あるいは、すべてのうちで最も多産な溝、
男の魂とは縁遠い高慢な女に言い寄れば、
愚かな振舞いをしては堪えなければならない、
そんな溝に落ち込むのが人生であったとしても。

（五七―六四行）

「鏡」に映る姿と同様、「私の自我」の拠って立つ処は、汚穢に充ちた現実である。「蛙の卵がこびりついた盲人の溝」といい、「最も多産な溝」といい、いずれも汚穢に充ちた生殖、性の猥雑さを連想させていて「私の魂」が憧憬していた「あの場所」とは実に対蹠的な様相を帯びている。現実に凝したこの「溝」にあって、悟りや完成に昏い「盲人」は、たとえば「高慢な女」と関わって自らを駄目にする愚行を演じたり、酷いことにも同じ族（やから）を「打ちのめし」たりして自ら省みることを知らない。そうした価値のない醜悪な生に堕してしまうのが「人生」ではあっても、その「人生」を再び繰り返えそうとする意志を持つとき、状況は一変する。そのとき、初めて愚かで価値のない生は、価値がないがゆえに生きるに値する生へと変貌するのである。「私の自我」は、価値のない生の生きるに値する生を次のように語って最後を締め括る。

I am content to follow to its source
Every event in action or in thought;
Measure the lot; forgive myself the lot!

When such as I cast out remorse
So great a sweetness flows into the breast
We must laugh and we must sing,
We are blest by everything,
Everything we look upon is blest.

私は喜んで行動や思想の惹き起した事件すべてを
その根源まで辿ろう、
運命を測ってそれを自分のなかに受け容れよう。
私のようなものが後悔をすてるとき
このうえなく深い優しさが胸に流れこんできて
私たちは笑わねばならない、私たちは歌わねばならない、
私たちはすべてのものに祝福され、
私たちの眺めやるすべてのものは祝福される。

（六五行―七二行）

「私の自我」の被る仮面とは、徹底してニヒリスティックな意志の極北に立っているといえよう。すべて無意味なもの、価値のないものをただ単に意味あるもの、価値あるものに転化させるのではなくして、そのまま無として捉えてそれをも放擲すること、そうした行為にこそ、実は生きるに値する生を「私の自我」は発見した。そのとき、すべ

てを撥無しようとするニヒリスティックな厳しい意志は、それとは逆にすべてに眼差しを注ぎ、すべてを許容する「深い優しさ」に浴することができる。そうして人間と、人間を取り囲む世界は醜悪な現実からしばし解き放たれて「祝福される」のである。まさにそのときである、あの「悪意に充ちた眼をした鏡」が「悪意」を取り払って「深い優しさ」に輝く眼を持った〈鏡〉に変るのは。しかし、〈そのとき〉の訪れはいかに稀なことか知らねばならない。ニヒリスティックな意志のもたらす「深い優しさ」、「祝福された」境地に沐浴することができたにしても、そこにはあまりにも苛酷な現実が常に奈落の深淵を覗かせている。それゆえ、〈そのとき〉が時熟するのは極めて稀なことなのである。

それにしても両者の〈存在〉への志向それ自体に限っていえば、ふたつの志向は最後まで正反対の方位を採りつづけた。〈存在〉の絶対化、「完成」を標榜して肯定的な上昇志向を持つ「私の魂」の、少なくとも〈存在〉への意志は受け継いだものの、不浄な「溝」へ堕ちてゆく否定的な下降への志向を「私の自我」が持つという点では、相変らず対極をなしている。また現実における人間の営みを「根源まで辿る」ことを是とする姿勢に、過去の意味を問うという逆行した志向が窺えるのも、「私の魂」との背反の証左となっている。[10]「私の魂」の志向とは完璧なまでに対を成す「私の自我」は、繰り返さるべき「溝」への下降と「根源」への逆行という遡行的な志向を持ちつづけて、ついに果しなく反復される生の運命を必然として受容するに至った。かくして「私の自我」は円環的な生の軌跡を描き終える。「天上」を仰ぎ見て「私の舌は石となる」と最後に呟いて黙した「私の魂」と、「運命を測ってそれを自分のなかに受け容れる」ことを許した「私の自我」とが、その対立関係から解放されて真に出逢うためには、「私の自我」は「後悔をすてる」と同時に「笑って歌わねばならない」のだ。

「完成」からはほど遠い、いわば欠如態としての生に暗然たる思いを抱懐する「私の自我」は（それゆえ、「私の魂」は絶対的な「天上」を目ざしたわけだ）、ひたすら「耐えよ」と言い放ったが、そうした生を前にして「後悔」

を覚えるのは当然の結果であろう。「後悔」とは、罪深き生、不浄なる生と価値のある生の狭間に生ずる極めて自然な情動であって、苦々しい自責の念を伴う。しかし、「私のようなものが後悔をすてるとき」、不浄なる生をもう一度生きようと決意した、あのときと同様に状況は一変する。不浄なる生は変らずとも、聖の、稀有なる瞬間がもたらされる。すなわち「このうえなく深い優しさ」が「私の自我」の胸を充たすのである。この瞬間の裡に、「私の自我」はその仮面を剝がして真に自分であるのかもしれない。「私の自我」の仮面とは、決然として「後悔をすてる」という断念によって造型されている。それは、まず無意味から意味へ、無価値から価値への順接的な転位の可能性を放棄する。そして無意味な生の繰り返しを必然として受容しながらも、その生すら放逐する。価値なき生の反復に見出される、いうならば逆説としての生の価値までも否定しようとするのである。すべてを限りなく無化しようとする意志に支えられたニヒリスティックな仮面は、このように否定の限界点に達することによってその存在理由（生きるに値する生）を保持している。ということは、否定の限界点とは肯定への反転を許容するものであることを仄めかしていよう。

「深い優しさ」に浸る「私の自我」はさらに新たな仮面を被る。それは、虚しくも無意味な生を繰り返す人間の「運命」を軽やかに「笑って歌わねばならない」という仮面である。その仮面を被りおおせたときには、「すべてのもの」、つまり世界から「私たち」は「祝福され」、また「祝福された私たち」が「眺めやる」[11]外界もまた「祝福される」のである。こうして「祝福された私たち」は再び仮面を剝がしていまやあるがままの自分であるといえるだろう。

ところでその仮面は断念としての仮面とちがって肯定的な意志を抱えてはいまいか。もはやそれは仮面とは呼べず、むしろ「私の自我」の素顔なのではないか。「笑って歌わねばならない」行為とは、思うにニヒリスティックな仮面が否定の極限に達したときに変貌した仮面である。確かに肯定的側面は窺えるが、どちらかといえば、否定と肯

定が隣り合せにある境界にその仮面は見出される。別の言い方をすれば、その行為は仮面とも素顔とも見做すことができる。また‘must’を当然の結果を推量する言辞としてではなく、当為として捉えるならば‘laugh’と‘sing’は自然な発露でなく、いかに自らを強いて及ぶ行為であるか理解されよう。この詩の最後の五行は、次のような仮面と素顔の緊張した力学を語ってそこに両極の包摂された場所を開示している。「後悔をす」てるという仮面を被ったとき、「深い優しさ」が顕現し、また「笑って歌う」という仮面を被ったとき、「祝福された」境地が顕現する。このように突如として「深い優しさ」、「祝福」が顕現するとき、すでに「私の自我」はその仮面を地に置いているのである。この聖なる瞬間は、仮面と素顔とを一体化した、まさに両極を包摂した場所を創り出している。そして断念と「優しさ」、「歌」と「祝福」といった二通りの関係は、また双方とも無縁なものではない。仮面としての断念も歌も、素顔としての「優しさ」も「祝福」もそれぞれに関連し合いながら、そうした場所とともに、「天上」の世界と好対照な究極の場所を創造している。

「笑って歌う」ことによって「祝福される私たち」とは、なによりもまず「私の自我」と「私の魂」のことを指しているが、「私たちは」といいだせるのは「私の自我」の生によって初めて可能となったのである。それゆえ、この場所にあって〈存在〉の絶対化は相対化され、〈存在〉の相対化は絶対化されたのである。がしかし、「笑って歌わねばならない私たち」が実際に自然と「笑って歌う」には、どれほどの時間を要するのか。当為として〈認識〉されたその行為が現実に〈存在〉として成されるためには、果しない時間が流れなければなるまい。

〈注〉

(1) W. B. Yeats; *Collected Poems of W. B. Yeats*, (London, Macmillan, 1977), 引用はすべてこの版による（略記号 *C. P.*）。

(2) William H. O'Donnell; *The Poetry of W. B. Yeats*, (New York, Ungar, 1986) p. 110.

(3) *C. P.*, p. 265.
(4) W. B. Yeats; *A Vision*, (London, Macmillan, 1978) p. 73.
(5) ibid., p. 82.
(6) ibid., p. 183.
(7) Robert Snukal; *High Talk*, (London, Cambridge U. P., 1973) p. 32.
(8) Richard Ellmann; *The Identity of Yeats*, (London, Macmillan, 1954) p. 9.
(9) Harold Bloom; *Yeats*, (London, O. U. P., 1978) p. 373.
(10) See John Holloway; Style and World in *The Tower* in *An Honoured Guest*, (London, Edward Arnold, 1965) p. 94.——J・ホロウェイは、「根源」とは、現実における出来事の原因でなく、「思想」や「行動」を生む本源的なものであると解しているが、それの在処を魂の世界に見出している。「溝」への転落から「根源」への遡行に至る推移に、「魂」と「自我」の混交を読み取る氏の見方は両者の相補的な関係を明示しているといえよう。
(11) See Charles Berryman; *W. B. Yeats: Design of Opposites*, (New York, Exposition Press, 1967) p. 146.——C・ベリマンは、生への肯定を表明した現実への「眺めやり」が、逆に生そのものからの乖離を結果するというアイロニーを読み取っている。